

---

# 虚勢頼りの最強青年

月宮零次

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚勢頼りの最強青年

### 【Nコード】

N3442Z

### 【作者名】

月宮零次

### 【あらすじ】

金を寄せ…？ お前に渡す金はない（さっき財布落としちまった…）。

決闘しろだ…？ その勝負、1発で決まることになるぜ（主に俺の敗北で）。

嘘は言っていない。だが、その自信過剰な虚勢が理由で避けられるようになった

青年、新垣月夜は異世界の神様に気に入られ、『異世界最強の力』とやらを手に入れる。

転移した世界での人生、力を手に入れた青年が見つける真実とは。

お馴染み定番の異世界もの、主人公の送る物語に刮目せよ！（どうかお願いします。）

## 1 1 プロローグ（前書き）

勢いで書いてしまった…。

初めての異世界物ですが、頑張ってみたいと思います。  
どうか、よろしくお願いします。

## 1 1 プロローグ

唐突ですが、手前は現在、とても優しそうな方々に金をせびられています。

学校帰りの昼頃、彼等はこう言って来たのです。

「持つてるだけ、金出せよ」

手の平をこちらに差し出す優しい方々、手前は遠慮するように後退する。

ところが、執拗に壁際まで追い詰めて来る方々に、あらがき げつや新垣月夜は、こう返す。

「お前等に渡す金はない」

ドスを利かせて威圧する。

優しそうなお兄さん方が、顔を見合わせる。やばい奴を引っ掛けちまったかという声。

彼等は示し合わせると、一目散に逃げて行った。

「（さつき財布落としたから…渡す金とか本当にないし…）」

空のポケットに目を通し、自分の金銭を確認する。

現在の所持金は0円だ、下手なRPGの主人公でもこうはなるまい。

先ほども、調子に乗っているからという理由で活を入れて下さるという優しいお兄様に、

“怪我しても知らないぜ…？”

そう返すと、一目散に逃げられた。

ああ、無論、怪我するのは手前のことです。

とまあ、俺（敬語はもう終わり）の日常を語ると、これが通常になる。

特徴のない普遍的な高校生なので、容姿は適当に村人A辺りを引き合いに出すといい。

こういう暮らし方が原因なのか、俺はある日の朝、変な爺に出会った。

時間はまだ午前3時頃、皆が寝静まっている頃に、俺は起こされたのだ。

そこは俺が寝ていた布団の上ではない、典型的な異世界っぽい真っ白な空間だ。

『ちょ、お前マジで気に入った』

そして、人を指差して来る爺。

こいつは親に、人に向かって指を差すなと教わらなかったのか、親の顔が見てみたい。いや、きつともう没しているから、見るとしたら仏様の顔になるのか、残念だ。

よし、興味本位に殴ってみよう。

「せいやっ！」

『あ痛っ！？』

俺の正拳突きまがいの一撃をみぞおち付近に食らった爺が頂垂れ

る。

「ちゃららーん。俺は経験知1、それと爺の毛根を手に入れた！」

爺の白髪を2、3本、根元から引きちぎる。

『うぎゃああああ！？』

「爺、もう起こすなよ。次に起こしたら皮膚を剥ぎ取るからな」

そして、俺は真つ白な世界で横になる、布団がないから寝づらいが問題ない。人間、寝ようと思ったたら何処でも寝られるはずだ。

『ちよ、ちよつと待て！ 起きろ、小僧！』

「…うつせーな、殺すぞ爺」

『ま、まあ聞け！ お前にとって良い話だ！ 聞いて損はないぞ！』

必死に懇願して来る爺を相手に、俺は自然に舌打ちする。

仕方ないから起き上がった。

「つまらない話だったら眼球剥ぎ取るぞ」

『ぶぶ、物騒なことを言うな！ まあ良い、それでは自己紹介からしようか』

コホン、と咳をついた。

どうでもいいが、こういう爺に限って“自分は神だ”などというクソみたいな発言をするからな、もし予想が当たっていたら残り少ない毛根をもう一度剥ぎ取ってやろう。

『ワシは、神だ』

「ずりゃああああああ！」

『アギヤアアアア!?!』

毛根を丸ごと剥ぎ取った、少ない髪の毛は、今の俺の一撃によって完全に消滅した。

数え切れない髪の毛を全て床に落とす、そして改めてハゲになった爺を見渡す。

「あ、意外にダンディーになった。良かったな、爺。」

『こ…小僧、キサマあ…神にこのようなことをして、タダで済むとでも…!』

「無駄に足りない髪の毛を大事にするより、正直なハゲの方がモテるぞ」

『あ…そう!?!』

バカだな、下手な不良でも引っかけからない話術だ。

しかし、今の話を本当とするのなら、これが神か、人間をやめた気分だ。

「それで、神様が何の用だ」

『うむ、では話そう』

真剣な顔つきになる。

『ワシはお前を気に入った。お前のその人生、この世界には勿体ない』

この世界、今、俺のいる世界という解釈で間違いないだろう。

『今からお前に、物凄い力を付与してやろう。そして、別の世界で生きるといい』



「ちょい待て」

『ふむ、どうした…？』

「爺、俺は冗談が嫌いだ、非常に嫌いだ。ついでに言うとお前は嫌いだ」

『う、うむ…！？　そ、そうなのか』

「詐欺は犯罪だ、そこは理解しているか」

『詐欺などではない、真実だ。見ている！』

そうすると、爺は天を仰いだ。

大層なポーズで天に向かって祈る、どこかの教祖様みたいな爺だな。

『ぱっぱらぱー！』

爺のクソみたいな祈りが終わり、俺の周りを眩い光が包み込む。うわ、何か加齢臭っぽい匂いのする光だな、何とかならないものか。

『今の光で、お前は《最終改変》という力を手に入れた』

「ふむ、厨二病っぽい名前だが、具体的には、どういう力だ」

『うむ、単純に言う则自身の肉体を強化する力だな』

「それは爺を一撃で殺せる力なのか」

『ワシは神だ、たかが人間の一撃では死なない』

「…使い方は」

『念じるだけじゃ、ただ、使いすぎると』

「どれどれ…」

ひたすらに念じる、肉体の強化、腕辺りでいいか…。

細胞が活性化するように、体内中の循環が早まった気がした。

先ほどのように眩い光が俺を包み込む、今度は淡い緑色の光だ、

加齢臭はしない。

身体全体の光が俺から抜け去った、まず、爺めがけて一撃放つ。

「ふんっ！」

結論から語ろう、爺は俺の眼前から消滅した。

爺の顔面目がけて放ったその一撃は、俺の目では捉え切れずに、いつの間にか爺の顔面を潰すように直撃したのだ。

ゲボアッ！？ という悲鳴と共に、爺が遙か彼方に吹っ飛び去ったということは言うまでもない、俺は右腕を見つめる。

「おお、本当の話だったのか」

主が消失したその空間で、俺はただ1人その力に酔いしれていた。

『ぐ…ぶ…』

何処かから聞こえて来る声、何か死にかけているが、気のせいだろう。

『も、もう…お前に関わっていると命が足りない…さっさと異世界に送ってやる』

「はぁ…そうですか」

『これは、忠告だ。その力は、使いすぎると肉体を損傷し、やがては死に陥る…使いどころを選び、生きるのだぞ…！』

「…なに、爺、ちょっと待　！」

次の瞬間、俺の身体は既にその空間になかった。

満ちる草原、高々とこちらを見下す山、青々しい空。

ああ、異世界に來ちまったのか。

「…で、俺はこれからどうしろと…？」

## 1 2 異世界

神様と名乗る、爺<sup>ハゲ</sup>の力で異世界に強制転移された手前こと、新垣月夜。

正直な話、異世界に来たといっても異世界特有の言語を話せるわけでもなければ、1人で自活できるほどの器量を持ち備えているわけでもない。

皆、自分がもしも 異世界で最強の能力を得たら、こうやって生きる。と、夢見ていることだろう。だが実際、残るのは爺への不快感だけだ、覚えておいて損はない。

さて、これからどうしたものか。

普通、小説、ゲームの世界だと、手当たりしだい見つけた家に入してタンスを漁ったり、壺を壊したりするものだが、生憎と、俺にそのような勇氣はない。

というか、何処からそのような勇氣が出て来るのか。

訪問した先が不登校児の家だったらどうするつもりだ。

いきなり家に変な人が出入りして、タンスの中の見られちゃいけない物とか、壺の中に溜まったティッシュとかをぶちまけられたら、たまったものではないぞ。

ああ、嫌な光景が目に見え…。

閑話休題。

「ま、それはいいとして…」

来ちまったものは仕方がない、この世界で成す目的など存在しないのだ。

神様、もとい爺の言葉が脳裏を過る。

「（力の使いすぎは、死に繋がる　か）」

強化したばかりの腕を見る。

少し念じる、が、強化した部分を強化する前に戻すことは出来ないようだ。

ならば制御は出来るか、試してみる。

落ちていた小石を摘み、手加減しながら力を入れる。

「…よし」

小石は、程良い所で指の圧力に負け粉々に砕け散った。

加減は出来るようだ。

「なら、次に成すことは…これしかねーよな…！」

力の強化　俺は、足の強化を念じる。

いざという時、もっとも必要になるのは力の強さではない。

虚勢を張って生きて来た時からの教訓、どうしても俺のハツタリが通用しない相手には必須とされた力、逃げ足だ。

「（念じる…！）」

両足に強化の力を行き渡らせる。

淡い緑色の光が俺を包み込み、数秒間、まわりついた後に消滅した。

「さて…！」

内心楽しみだった、強化した足の速さはどれ程の物なのか。

走る！

足は前に前に動いた、当然、視覚では追い切れない速さだ。

転ぶ！

「どわあっ！？」

草原にうつ伏せになる。

そ、そうか、走るということは、別部分の運動能力がそれに付いて行かないといけない。例えると、俺がしたことは、世界大会に進出できる陸上選手の足を貰った小学生と同じだ。

「（となると…身体全体の強化が必要になるのか…）」

腕の方も、近々、このままの身体で維持すると使い物にならないだろう。

「くそっ！ あの爺、欠陥能力じゃねーか！」

最初から部分的な強化など期待できない。出来るのは全体強化のみ、ということだ。

「仕方ねーな…1回、ただだ…！」

足と腕以外の全体を強化するように念じる。  
なるほど、強化する面積が多いほど念じる時間も必要になるわけ

だ。

淡い緑色の光が、さきよりも長い時間、俺にまわりついていた。

そして、解放された。

「これで、よし…！」

気のせいか、先ほどより風の音が感じ取れ、遠い景色が見えるようになった。

眼と耳の強化のおかげだろう、これも制御出来なければ、後々不便か。

「じゃ、気を取り直して…！」

今度こそ、俺は走り抜けた　　！

草原をあつという間に走り抜け、移り変わる景色に俺は見とれていた。

異世界か、案外、悪い物ではない。

もしかしたら、ここで見つけられるかもしれない、俺の　　、

「！」

いつの間にか草原を抜けていた。

木々が目の前に広がっている、眼の強化をしていなければ衝突していたかもしれない。

ガサガサ！　と音がする。

「…！？」

草むらからの影。

まさか、エンカウントでもしたのか！？

魔物に虚勢を利かす余裕はないぞ…って、そういや、わざわざ虚勢を張る必要もないか。

身構えた、強化した身体、初の実戦。

敵の気配が感じ取れる、よし、強化された嗅覚と聴覚を使ってみるか。

息遣いからすると、生物であることは間違いない。

嗅覚で匂いを感じ取る、…女の子の匂いだ。

「女の子…？」

まさか、森の妖精とかいうオチじゃないだろうな。

一応、俺は男女とも殴る奴の分別は弁えているつもりだ。

優先順位は神様爺を筆頭にしているが、殴る奴トップ3の中には老女すら入らない。

……少女の幽霊とかでは、ないよな…！？

ガサガサ！

何かが出て来た！ スライムでありますように！

眼を凝らす、やはり、少女だ。

しかし、妖精でもドワーフでもエルフでも、ましてや幽霊でもない、真正正銘の人間だった。



「誰...？」

# 1 3 少女（前書き）

少し予定より遅れましたが、投稿します。

## 1 3 少女

少女は俺を不思議な眼で凝視した。

乱れた黒髪のツインテール、そして幼いその身体、小学生が良い所だろう。

一見、ただの少女だが、所々擦り切れた傷の跡を見ると、何かしていたのだろう。

虫取り…違うな、虫カゴも虫取り網も所有していない。

ならば、何か。

「お前はここで何をしている」

「それは、こっちのセリフ」

「なに…？」

少女から返された言葉は予想し難い物だった。

「ここは、わたしの家」

……？

ここは、わたしの家。というのは本来の現代語で訳せ、ということだな。

つまり、この木々が密集した虫だらけの楽園が、こいつの住居だと。

信用できない。

「ここはお前の土地なのか」

「ちがう」

ほらみる、やっぱりそうだ。

こいつは人の住居の屋根裏に、不法侵入したホームレスと何ら変わりはない。

「でも、わたしはここにいる」

「あんな……」

一から順に説明する。

人の土地に勝手に入ってはいけないこと。

更にそこに住居を作って暮らしてはいけないこと。

それ等をまとめて懇々と説明する。

「そうだったの……」

納得したように頷き、少女は俺の言葉を理解した。

ただ、問題はこれからだった。

「なら、わたしは何処にいけばいいの……？」

「そりゃ……」

自分の家に帰ればいい、そう言おうと思ったところで口を噤む。

そもそも帰れるなら、このような場所にいる必要はない。

というか、こんな幼い少女が何故、森の中などで暮らしているのか。

迷子、というのはありえる話か、とりあえずは名前から聞いてみよう。

「お前、名前は？」

「留美奈」

「国籍は？」

「日本」

「なるほど、そうかそうか日本か、俺と一緒にだな……なに？」

日本、だと。

ちよつと待て、この異世界に連れて来られたのは俺だけじゃないのか。

問いただしてみろ。

「おい、お前…どうやって、この世界に来た」

「おじいさんに、つれてこられた」

「そいつはもしかして、ワシは神だ…とか、ほざいている爺のことか」

「うん」

何てことだ。

あの爺、気に入った人間を片っ端から異世界に送りやがっている。しかもこんな幼い少女まで送り込みやがるとは、何たる外道だ。初対面の人に殴りかかる奴並に外道だな。

「そうか…そういうことが…」

1人納得する。

だが、神様爺がこの少女を異世界に連れて来た理由は何なのか。

「（確か…俺の時は、お前の人生はこの世界には、もったいない。という理由だったな）」

過去から要点を引きずりだす。

つまり、神様爺が人を連れて来る理由は、そいつの人生が特別なことだ。

「えーと、宮下。1つ聞いていいか」

「うん」

「お前、今までどういう風に生きてきた？」

「ただ、ずっと家にいただけ」

ふむ、引きこもり気味の少女だったというわけか。

もしかして、学校で虐めにでもあっていたのかもしれない。

だが、そこまで特別な過去でもないだろう、普通にありふれている話だ。

思案する俺を見て、少女は小声で呟いた。

「そう、ずっと…家にいただけ…」

「…どういうことだ？」

「わたし、外の世界のこととはあまり知らない…ずっと、まどから見ただけ。ママとパパ、いつもいなかった」

寂しそうな少女の目、徐々にそれが光を帯びる。

「だから、おじいさんが外に行っていていって言ったから、わたしはここに来た」

「……もしかして、お前……」

もしかして、こいつは、生まれてからずっと家に閉じ込められていたのでは？

## 1 4 救い

少女の言葉には何よりも重みがあった、ただ、辻褄は合う。  
神様爺が気に入りそうな人生だろう。

何よりこの決定的なまでの常識の無さ、それ等が全て決め手となっている。

思わず、言葉を濁した。

「それは…大変な人生、だったな…」

「……？ いつものこと、だよ……？」

いつものこと。

そう、この少女にとってはこれが常識なのだ。

その純粋な瞳からは少女の残酷な過去が表れている。

「お前、ずっとここで暮らすつもりだったのか」

「うん」

「いつから、ここに居た…？」

「んと、3日かな」

「しょ、食事とかは…？」

「これ」

そう言い、少女は木の実のような物をポケットから取り出した。  
取りだされた木の実は、紫色、そして毒々しい形をしている。  
俺の本能が手を動かす。

「バカっ！ そんな見た目危なさそうな物、口にするな！」  
「……！」

少女の手から木の実を奪い取る。  
危なっかしくて見てられない。

「返して」

少女が手を差し出して来る。

そもそも言葉は何処で覚えたのだろうか、テレビ辺りから吸収したのか。

残酷だ、俺は今、残酷なことをしている。

人とともに触れあったことのない少女に、最低な行為を犯している。

少女からすれば、自分のものを取った悪人にしか見えないだろう。だが、俺はそれでも絶対に返さない。

「返すわけねーだろ！」

「どうして...？」

「死んで欲しくねーからだよ！」

大声で一喝した。

少女は目を丸くしている。

なぜだろう、何故、俺はこの女の子を見捨てられないのだろう。

こいつとは会ったばかりで、何より無視して去ればいいものを、何故。

俺は、こいつに生きて欲しいと願うのだろう。



「……わりーな、怒っちまって…」

俯いた。

こんな小さい女の子に怒鳴った自分に後悔した、嫌な気分だった。最悪だ…。そう呟いた俺を、少女は見据える。

「だいじょうぶだよ、心配、しないで……」

「そうか……」

少女の慰めの言葉に、俺は決心した。

得意の、虚勢を張る。

「俺が、してやる…お前を、この世界で不自由なしに生きられるように…してやる」

確証などない。

それでも、この少女を元の世界にそのまま帰すわけにもいかない。そして、このまま放っておいてやるわけにもいかない。

「俺に全て任せろ、俺についてこい…!」

自分勝手な意見だ、少女の言葉すら聞かずに自分の意見だけを押し通そうとする。

いつから、こんなバカな虚勢を張る人間になっちまったんだろうな。

「俺が、お前を救ってやる。だから、ついてこい」

言い切った。

俺のしたいこと、この世界で成さなければいけないこと。  
それ等全てを決意して、言い切った。

少女はひたすらに目を丸くしている。

だが、意味は伝わらずとも、少女は俺の手を取った。

「ありがとう」

優しい目で、俺を見つめた。

その後、俺たち2人は森を出た。

そして、強化した視覚で全貌を見回す。

街が見えた、そこで、こいつに普通の暮らしをさせてやろう。

そう思い、俺は少女を連れ歩いた。

異世界で少女を救う、バカげた話だ、だが、まだ俺は知らなかった。

これが、旅の、始まりだということを。

# 1 5 神の子 (行間?) (前書き)

PV1200アクセス+ユニーク500アクセス突破！  
嬉しかったので、続いて投稿します。

## 1 5 神の子（行間？）

これは、7年前の出来事。  
新垣月夜が、異世界に来る前までの話。  
とある男の、物語。

私は、街の中央に居座っていた。  
噴水付近にある砂場の中心で戯れる子どもたちを見守る。  
微笑ましい限りだ、あの少年、少女には未来がある。  
まるで悪意のない純粹無垢な心に、私は心惹かれていた。  
だが、それが悲しい。  
このような少年少女たちの笑顔を奪う計画を、私は実行しようとしていたのだから。

「（さて、始めようか）」

ゆったりとした動きで、子どもたちに接近する。  
1人の少年が、私の姿に気が付いた。

「お兄さん、だれ？」

「ただのしがない、革命家さ」

「革命家…？」

「そう、自分の価値観を人に押し付けようとする、悪者だ」  
「お兄さんは、悪い人なの？」

少年の言葉に、薄ら笑みを浮かばせた。

「ああ、だから、君たちは、私のようにはならないように生きなさい」

「……」

何を言っているのか分からなさそうに、少年は首を傾げた。

隣で呆然とする少女も、また、その意味は理解できていないのだろう。

「さようなら。次に会う時は、敵同士だ」

少年と少女にそう言い、私はその街の外に向かった。

数刻の時間が過ぎた。

そろそろだ、腕時計を見て、そう呟いた。

瞬間　巨大な爆発が、街中を包み込む。

「始まったか……」

人に被害はない、被害があるのは、その街にある全ての家屋だけだ。

勿論、家の中にいる場合は死ぬこともあるだろう。

それに付随する、食料なども、当然焼き払われてしまうだろう。

騒音が街の外まで流れ込む、悲鳴、喧騒、さまざまな声が重なっ

ていた。

「（行こう……）」

騒然とする街中に、私は入って行った。

外から見ると、分からないものだが、中から見ると、その全てが目に見る。

逃げ惑う人々、そして崩れ落ちる想像以上の家屋。

全てが終わりを迎えた、その空間で、1人の男が避難を始めていた。

ルギッド・アナートル。

この街の町長を務め、そして、この街が腐った元凶。

あらゆるコネを使い、この街の町長の座に居座った老害だ。

「どこに行こうというのですか」

大量の荷物を持ち、避難を始めていたルギッドに語りかける。

「誰だ、キサマは!？」

「お察しを、この騒ぎを起こした者ですよ」

「な、なにい!？」

「そう慌てずに、街を見渡して下さい。見ましたか…？　これが、あなたの街ですよ」

焼け落ちるその全て、漆黒の黒煙に包まれる空をルギッドは見た。

「……何が目的だ、金か……!? 金なら渡さぬぞ……!」

「ふっ、面白いことを言う。自分の息子と娘の命より、金を優先しますか……」

「なっ……!? あの子たちをどうした!?」

「何もしていませんよ。あなた次第、ですがね」

「ここまで街で騒ぎを起こして、これ以上、何を求める気だ……!」

「救いを、全ての者に、平等の暮らしを」

「な……どういう、ことだ……!?」

その意味を理解できていないルギッドは、先ほどの子どもたちと変わらない。

思えば残酷な話だろう。

街の住民の安全すら確認せず、金目の物を持ち出して逃げる。

息子、娘などより金を優先する。

そして、それ程の財力があるのに、重税で苦しむ人間に分け与えない。

町長としても、親としても、そして人としても、腐り切っている。

「……さて、余興はここまでにしましょう」

「な……!?」

私は懷から取り出した銃を、ルギッドに向けた。

「キ、キサマ……これ以上の暴挙は、神が許さぬぞ……!」

「ご心配には及ばない、神によって私は、この世界に導かれたのですから」

「……すると、キサマは、神の子……!?」

神の子、それは面白い捉え方をしたものだ。  
引き金に力を込める。

最後に、ルギッドが言い放った。

「キサマの名は、何だ……！？」

「“キリスト”。とても名乗っておきましょうか」

「キリ、スト……？」

「お休みなさい、そして、神の祝福を」

乾いた発砲音が、街中に響いた。

断末魔をあげて、脳天に穴を開けられたルギッドが倒れ込む。

それを気にする者はいない、大半の住民が避難し切ったその中で、  
少年と少女はいた。

「パパ、パパ……！」

ただの肉塊に声をかける、少年と少女。

私はルギッドの持っていた荷物に手を伸ばす。

そして、それを持ち去って行った。

最後に、少年がこちらを見たのに気付いた。

ゆつたりと、振り向いてやる。

これが、物語の始まりだ。

「また会おう、少年」



## 1 6 到着

少女、留美奈を連れた俺は、遠い街を目指していた。

強化した視覚で見たせいか、近そうに見えても遠いのが実情だ。

隣を歩いている留美奈は、ずっと家に閉じ込められていたせいか、たった3日間だけだが、路上で生活していたこともあり、相当に疲れているようだ。

「大丈夫か、辛かったら言うんだぞ」

「うん、わかった」

さつきからこの会話の繰り返しだ。

俺が心配性すぎるのかね……。

歩いてから1時間は経った頃か、やっと、目的の街に着いた。

入口には、壊れたまま腐りかけている看板が落ちていた。

その内容は、“ようこそ、ルギッドシティに”。そう書かれているだけだった。

暴徒にでも壊されたのだろうか、治安は悪そうだな。

「よし、まずは泊まれる所を探そう。それから、飯を食おう」

と、言ってみたはいいものの。

金がない、これでは異世界であろうと泊まれる所を探すのは不可能だろう。

異世界でモンスターを倒せば手に入る、などという夢設定もありはしない。

どうしよう、内心困っていた、その時だった。

「あれ、旅人さんかな…？ 珍しいね、こんな辺境の街に」

慎ましやかな女性が声をかけてきた。

見た目から察するに、俺と同年齢か、それ以下だろう。

日本語が使えるのか？ いや、異世界に日本語なんてマイナーな言語があるとは思えん、もしかしたら神様爺からの言語に対しての配慮かもしれないな。

俺も言葉を返す。

「あの…唐突で悪いのですが…」

「何でしょうか？」

「この子にご飯を頂けないでしょうか、もう3日もまともな物を口にしていないんです」

「そうなの？ それは大変ね、ちょっと待ってて、兄さんに言ってくるから！」

大急ぎで駆けて行き、暫くすると、戻って来た。

「うちに来て下さい。簡単な“魔法食”ですが、身体を暖めるにはちょうどいいですよ」

「ありがとうございます！」

素直に頭を下げる。

しかし、魔法食とは一体どういう料理だろう。

優しそうな人だから毒を入れるとは思えないが、どうなんだろうか。

女性に付いて行くと、どこにでもありそうな一軒家についた。遠慮しがちに家の中に入って行く。

「おつ、来たか。その席につけよ」

「お邪魔します」

「お邪魔します？ 変わった挨拶だな、まあ座れよ」

活き活きとした男性が、食卓の上にある料理を見て言った。

「どうやら、言語に違いはなくとも、文化に多少の違いはあるらしい。」

魔法食なんて存在するんだから、分からんでもないが。

「ほら、留美奈。挨拶しろ」

「えと、お邪魔します」

「おつ、たっぷり食っていけ！」

留美奈を席に座らせると、俺も横の席に座った。

対面には女性と男性の2人が座る。

「まず自己紹介からな、オレはデイル・アナートル。この街では商人をやっている」

「わたしはラビィ・アナートル。兄さんとは2つ離れているけど、仕事を手伝ってるわ」

外国人似の名前、ということとは、俺もそっちに合わせた方がいいのだろう。

「手前はゲツヤ・アラガキです。この子は、ルミナ・ミヤシタ、ちよつと事情があつて旅に出ています、それと、聞きたいことがあるのですが……」

聞きたいのは勿論、魔法食についてだ。

「その前に、さつさと料理を食っちゃおうぜ。話はそれからだ」

俺の言葉を制すように言った。

「あ、すいません……」

「いえいえ、ゲツヤさんもルミナちゃんも遠慮せずに食べて行つて下さい」

「うん」

言葉を返す留美奈の目は既に食事に向いている。

俺も少し腹が減った、まずはここで腹ごしらえするのがいいだろう。

「いただきます」

手を合わせておじぎをする。

留美奈は挨拶をすると、遠慮もせずにスプーンで料理に食い付いた。

「あ、留美奈、こぼしてるぞ。ほら、ちゃんと食べ」

「ふふっ、兄妹のようですね。似てませんけど……」

そりゃそうだ、俺と留美奈に血の繋がりはない。

「オレたちも色々聞きてーことがあるけど、まあ、ゲツヤ君も遠慮しないで食べよな」

「ありがとうございます」

俺もスプーンを手に取り、食事に手をつけはじめた。  
食い散らかす留美奈の面倒を見ていたせいもあって、ゆっくり食

うことは出来なかったが、2人はそんな俺たちを微笑ましく見守ってしてくれた。

## 1 7 境遇

食事を終えた俺たち2人に、デイルは唐突に質問を投げかけてきた。

「ゲツヤ。君は、“キリスト”なる人物を知らないか？」

キリスト。

それは俺たちの世界では老若男女の境界を越えて周知の人物、神の子だ。

だが、別に俺自身はキリストを神の子など信じる気もなければ、1つの宗教に入れ込むような人間でもないせい、その印象は薄い。

「デイルさんのお望みの情報ではないと思いますが」

「構わん。分かることがあれば、教えてほしい」

純粹、そして真剣な面持ちでこちらを見ていた。

俺は知っている情報だけを出す。

「俺たち2人がいた場所では、神の子と呼ばれている人物です。ただ、本当に実在したかどうかは不明だし、もう何千年も前の人物です」

「……、そうか、分かったよ。ありがとう」

落胆するように肩を落としたデイル。

彼の期待していた答えを俺は持ち合わせていなかったらしい。

「あの、何故そのようなことを、お聞きに？」

「……旅人の君たちに話すことでもないが、聞いて貰えるだろうか」

「もちろん」

力強く頷いた俺に、デイルは隣のラビイに話していいか、確認を取る。

無言でラビイは頷き、了承を得たデイルと俺は向かい合った。

「もう7年前の話だが、俺たち2人は当時、砂場で、ある男と出会った」

話を始めるデイル、その内容は7年前まで遡るらしい。

当時、この街では人工的に起こされたであろう大災害があったらしい。

家は焼け落ち、建造物の全てが一日で瓦礫の山と化した。

その災害で、デイルとラビイは実父を失ったらしい。

街の人達は、災害で犠牲になったと推測しているらしい。

デイルは悔しそうに拳を作り、机を叩いた。

が、

「俺たちは見たんだ……！ キリストと名乗る男が、確かに父さんを殺した所を……！」

街の人々は避難に忙しかったせいか、誰一人、その姿を見た者はいなかったらしい。

必死でその男が殺したという事実を証明しようとしたデイルの意見は、誰一人にすら信じて貰うことが出来なかった。

「遺体が見つかれば、銃痕などから分かるのでは？」

「その遺体が見つからなかった……！」

愕然とし、俯いた状態でデイルはそう言った。

隣に控えていたラビイも苦虫を噛み潰したような表情で言う。

「父は評判の悪い人物でしたし、もしかしたら、街の人々が隠したのかもしれない」

「大変でしたね……」

事の顛末を知った俺は、気の毒そうに、それだけ言った。

結局、重苦しい空気のまま俺たち2人は家を出た。

魔法食のことについては聞けなかったが、厄介事に巻き込まれるつもりはない。

早々に家から出て、留美奈の住居を探すことにした。  
デイルとラビイが並び、俺たちを見送る。

「すまないな、こんな暗い話をしてしまって」

「いえ、お気持ちは察します」

「また遊びに来て下さいね、今度はわたしが、ちゃんとした料理を振る舞いますから」

「はい、何から何までありがとうございます」

そう言っただけの挨拶を告げた。

何も聞けなかったことに不安を感じつつも、とりあえず一休みすることにした。

2人、噴水付近にある砂場の横にあったベンチに腰をかけ、街を見渡した。

そこに、さっきも見たような看板を見つけた。  
薄汚れた文字で、ようこそ、ルギッドシティに。そう書いてあった。

「（なるほどな）」



暴徒の仕業、というよりは街の人々が意図的に壊していたのだらう。

評判が悪かった理由までは知らないが、確かに、嫌われていたような雰囲気は街中に広がっている。

既に町長は変わっているだろうが、町長の息子である2人に同情するような人は誰一人いない。全員が、今の街に満足しているかのように歩いていた。

新品の看板には、綺麗な文字で現在の街名が綴られ、街の雰囲気を一転させている。

溜め息をついた。

この街で本当に留美奈が暮らせるのだろうか、心配が止まない。ふと、前を見ると、障害物のように、人が立っていた。

「やあ、元気だったかな」

黒髪の、優しそうな好青年が、俺たちを見下ろす。

「どなた、でしょうか……？」

「お忘れですか、この私の名を」

お忘れも何も、最初から会ったことなどない。

明らかに人違いをしていることに気づいていない青年に、俺は返答した。

「あの、人間違いではありませんか……？」

「……、ああ！」

首を傾げていた青年だが、間違ったことに気付いたのか、声をあ

げた。

「申しわけありません。似ていたもので、つい」

申し訳なさそうに謝る青年に、俺は一声、いいですよ。と、そう言うつもりだった。

しかし、そんな言葉をかける前に、青年の言葉で、俺の口は凍るように閉ざされた。

「私の名はキリスト。以後、お見知りおきを」

## 1 8 用心棒試験

異世界で殺人犯に出会った時の対処法を、知っている人は少ないだろう。

というか、知りたいとすら思わんだろう。無論、俺も知りたかない。

「それでは」

挨拶をかわして去る殺人犯の後姿を眺める。

止めるべきだろうか、止めないべきだろうか。  
隣の留美奈に視線を移してみる。

「ん」

どうやら何も考えていなかったらしい。全て俺任せですか、そうですか。

さて、どうしたものだろうか。

一応、神様爺に貰った最終改変っていう能力があるにはある。  
ただ、相手が殺人犯という証拠もないのに使っていい物なのだろうか。

「（うん、無理だな）」

諦めた。

何せ、相手は見るからに優しそうな好青年ではないか、人殺しとは思えん。

「留美奈、俺たちもそろそろ行こうぜ」

「うん」

手を繋いで立ち上がる。

この街で適当に情報を集めた後、留美奈の住居を探すでしょう。

一番情報の集まりそうな所はどこか。

「（ゲームなら酒場とかだが、こんな小さな子どもを連れて酒場は勘弁だな）」

まだ小学生になったばかりであろう年齢の留美奈を連れて入るのは無理だろう。

それ以前に今は昼ごろだ。こんな時間に酒場とやらに人がいる気がしない。

なら、次に情報が集まりそうな場所は。

「（町長の家とか、かね）」

善は急げという。

俺は思いついたことを即座に行動に移そうと留美奈を連れて町長宅を探す。

偶然通った通行人に、町長宅の場所を聞いてみる。

案外、付近にあつたらしい。が、何やら厄介事の気配がする。

「（嫌な予感がする、いや、むしろ嫌な予感しかしない）」

町長宅の前まで来ると、こっそりと玄関扉を開けて中の様子を見る。

住居不法侵入罪に問われるのだろうか、とか心配しながら中の音を聞いた。

“俺は見た！ 親父を殺した男が、この街にいたんです！”

“と、言われてもね”

“もういい！ 俺だけで捕まえる！”

うわ、やっぱり厄介事じゃねーか。

何てネガティブな異世界だ。神様爺め、次会ったら半殺しではすまんぞ。

大きい音を立て、扉を閉めたデイル。

視線は合わなかった、俺に気付かず一目散に家に向かって出て行く。

俺はというと、反対に扉をノックしていた。

どうぞ、という声を聞いてお言葉に甘えて入って行った。

中には、今にも枯れそうな老人が椅子に腰かけていた。

「何ですかね」

これまでのいきさつを適当に話す。

その中に、神様爺から貰った最終改変の能力に対しての説明は抜かしている。

町長は、ふむふむ、と開いているかも分からないその眼で俺の言葉を聞き続けた。

「つまり君はあれだね、異世界からやって来た。というわけだ」

「まとめると、そうですね」

「それで、この世界で生きる方法を探している、と」

「この子が1人で暮らせる安全な場所はないですかね」

「ふむ、この街もそれなりに治安は整っているが、魔物の被害は減

らないからのう」

「魔物？」

「ああ、普段は街の外に出没するのだが、おや、ここに来るまでに遭わなかったかね」

「いや、会ってないです」

魔物が存在するらしい。

被害があるということは、殺しても罪にはならないのだろう。

「ふむ、ところで旅人の方。腕っ節には自信があるかね」

老人が眉を動かし、問いかけて来た。

どう返すのが正しいのだろうか、思索する。

「それなりには」

「ちょうどいい、今、この街では用心棒を雇っている最中だったのです」

「用心棒、というと？」

「近年、この街でも犯罪が多発しておりますので、その予防ですよ」

つまり、誰かの要人警護というより、全体的な警備というのが正しい解釈だろうか。

「もしも用心棒に雇われた場合の対価は？」

「前金として、金貨1枚、銀貨5枚、銅貨10枚。お望みならば家も用意しましょう」

「異世界から来たものでして、金銭価値に疎いのです。銅貨10枚で銀貨何枚分ですか？」

「銅貨10枚ならば、銀貨1枚程度ですね」

「すると、銀貨10枚で金貨1枚ということでしょうか？」

「はい、そうです」

だいたい分かった。

ようは、用心棒として勝ち上がれば留美奈を暮らさせるだけの場所が出来る。

俺の表情を読み取ったのか、老人は言った。

「ただし、用心棒としてふさわしいかどうか、近々行われる雇用試験に受かることが条件ですが」

そこは問題じゃない。

最終改变の力があれば、負けることはないだろう。

「試験の日程はいつですか？」

「明日じゃよ。本来なら締め切っているが、参加しますかね？」

「お願いします」

町長に話を通した後、町長の計らいで、家がなければ1日だけなら貸そうという話があった。当然のように、受けた。

町長が棚から取り出した鍵を持って来る。

「ワシの家の後ろの家の鍵じゃ、持って行きなされ」

「ありがとうございます」

礼をする。

相変わらず話を聞いていない留美奈を連れて家を出た。

町長宅から出ると、後ろの家はものの10秒も立たずに着いた。

鍵を使って扉を開けると、丁寧に掃除が行き届いているおかげか、せまいが寝食は出来そうな環境だ。

「よし、留美奈」

「どうしたの？」

「俺はちよつとだけ用事があるから、ここにいるよ」

「……？ 月夜はどうするの？」

「最終確認をしないきゃいけない。腹が減ったら町長に言えよ？」

「……わかった」

物分かりのいい留美奈を置いて、俺は街の外に向かった。

俺の最終確認、それは この力が、魔物に通じるかどうか。



## 1 9 魔物

街の外に出没するという魔物、それに俺の力が通用するかどうか。1度だけ全体強化を使った俺は、常人とは比較にならないほどの力を持っている。

それで通用しないなら、もう1回使わなければならないだろう。

「（試験の最中に強化は、あまり使いたかないからな）」

強化中はどうしても隙が出来る。

試験が決闘方式だとすれば、一瞬の隙が命取りとなってしまうだろう。

あらかじめ必要な分の強化はしておいて損はないだろう。

街から適度に離れてみる。距離にして、2、3km離れた時のことだった。

「（複数の気配あり、人間の気配じゃねーな）」

ここは平地だ。

隠れる場所などないし、絶好の戦闘地帯だ。

それでも、やはり警戒はされるだろう、更に街から離れてみる。その間に、魔物の数とやらを推測計算する。

「（3、4匹つてところか）」

異常に強化された聴覚で呼吸音の数を探った。

後ろを振り向き、街を見る。

既にぼやけかけている、強化した視覚でぼやけているならば、相

当だろう。

立ち止まり、襲撃を待つ。

来た！

“グゲアアアアアア！”

複数の魔物の声が重なって聞こえた。  
後ろからの襲撃、遅い。

最低限の動きで避け、背後を振り向いた。

「（陸型が3匹、鳥型が1匹か）」

地に足をつけたカエルの変種のような魔物が3匹に、カラスの変種が1匹。

魔物らしい、残虐な格好立ちをしている。

機を待つように待ち構える魔物4匹、どうやら、それなりに頭は働くらしい。

「安心しろよ、ガチンコ勝負、下手な小細工は使わねーよ」

言葉が通じているかは分からない、が。

その言葉を聞いた瞬間に、魔物4匹は奇声を発しながら襲いかかって来た。

“ゴゲエエエエエエ！”

「おおおおオオオオオオオオオオ！！」

魔物1匹1匹の動作が遅い、敵が大きい口を開ける前に、ボディに一撃叩き込む。

“ゴエア！？”

奇声を発して倒れた魔物に眼を向ける余地はない。

「まだまだ、物足りねーな！」

続いて、一瞬驚いたように足を浮かせた、もう1匹の陸型魔物に肘で一発、叩き込む。

“ゴオグア！？”

「残り、2匹！」

強化した足が異常な速度で、もう1匹の魔物に近付いた。陸型の魔物は俺の姿を見失ったのか、各方向を確認している。

「後ろだよ、バーカ」

声をかけると反射的に大口を開けてきた。

開いた口の中にある、ぬるぬるとした舌を掴む。

“オゴツ！？”

驚異的な握力で、その舌を握りつぶした。

血は飛び散らない、代わりに黒っぽい魔物の液体が飛び散った。

残り1匹、鳥型の魔物。

“クエアアアア！”

危険を察知したのか、大空に飛び上がる。  
なるほど、空に逃げるっていう手があったな。

「だが、浅い知恵だな」

俺の強化した足腰は常人のそれと比較にはならない。

力を入れ、      跳ぶ！

「オラああああああ！！！」

“ク、クエ！？”

「相手が、悪、かつたなあああああ！！！」

驚き空中で動きを停止した魔物の頭部に、最後の一撃を叩き込んだ。  
だ。

墜落する前に黒い血しぶきを上げて消滅した魔物、俺はそれを確認した。

地に着地し、拳を握りしめた。

「（よし、上出来だ）」

まだまだ俺自身、この力に使い慣れてないせいか、動きに無駄がある。

それと、偶然、この魔物たちが弱かったという可能性も否定はできない。

ふと、魔物が消滅した場所に何かあるのを発見した。

「何だ、こりゃ？」

魔物の死骸、というよりは素材といった方が良いのだろうか。  
鳥型の魔物が消滅した地点から落ちて来た素材も含めて、4つある。

こういうのはゲームならば交渉などに使えたりもするはずだろう、  
全て拾う。

ポケットに入れた素材が、妙にぬるぬるして気持ち悪い。

「後何回か、戦ってから帰るか」

首を左右に動かし、こきこきと音を鳴らす。

その後、何匹かの魔物と戦ったか忘れたが、苦戦はしなかった。

素材を全てポケットに入れ、街に向かう。

「（さて、留美奈のところに帰るか）」

それなりの戦利品をポケットに入れながら、俺は歩き始めた。

## 1 10 戦利品

街の中に入り、町長宅に向かった。

用件は1つ、手に入れた素材の使い道だ。

カエルの変種から取れた素材が7個、鳥型の変種から取れた素材が2個。魔物の中には素材を落とす者もいれば、落とさない者もある。

あまり取れなかったのが心残りだが、本来の目的である力の確認は充分だ。

町長宅をノックする。

どうぞ、という声を聞き、中に入って行った。

「おや、先ほどの人が、何か不具合でもあったかね」

「いや、とても住み心地の良い家でした。今回は別の要件です」

「別の要件じゃと？」

町長の顔が疑念の表情に変わる。

俺は迷わずポケットの中から、9つの素材を机の上に置いた。

町長は出された素材の全てに手をつけながら、俺の方を向いた。

「これを、何処で手に入れたのかね」

「魔物を殺したら出てきましたね」

何とも思わず返答した俺に、町長は目を見開いた。

「信じられん」

素材の1つである、鳥型の魔物の素材を確認しながら町長は青冷

めた。

「“グループバード”の素材を、1人で手に入れることが出来るのは……」

グループバード、多分、あのカラスの変種の魔物のことだろう。あの魔物は直接的な戦闘には加わらず、上で傍観していることが多かった気がする。

他の魔物の群れを倒すと、自分だけ空に逃避していたが、俺の跳躍の敵ではない。

「何か、飛び道具でも使ったのかね？」

「いえ、素手です」

「素手？ 奴は飛んで逃げただろう、どうやって素手で倒す」

「跳んで殴りました。ああ、もちろん、ジャンプの方ですが」

「……………。ふむ、異世界人とは未恐ろしいものよ」

口を噤むように町長は押し黙った。

流石に言い過ぎたかもしれない。そんな大層な魔物を跳躍して倒したなどという化け物染みた所業をするのは目立ちすぎたか。

町長は確認後、感心するかのように言った。

「この地域の魔物は2種しかない。お主が倒したのは、ビックフログとグループバードという名の魔物じゃ、因みに、成人男性が10人集まってもビッフログ1匹に数十分、グループバードは数時間に1匹がいいところか」

やばいな、俺の力が疑われ始めている。

目立つのだけは避けたい、何とか気弱に振る舞おう。

「いや、かなり苦戦しましたがね。もう、後は帰って寝る気力しかないですよ」

苦笑してそう語りかける。

実はまだまだ動けるし、後100匹倒して来いと言われても十分な余力が残っている。

「そうかいそうかい、それで、この素材は？」

「売れるなら売ります。俺には必要のないものですから」

「あいわかった。ワシが専門の業者に連絡してもいいが、どうするかね？」

「お言葉に甘えさせて貰っても構わないでしょうか」

「うむ、問題はない。なら、明日の朝方にでも来なさい」

そう言って町長宅を後にする。

「（危ねーな。この噂が広まらないようにしないとな）」

これだけの力を持っていれば必ず、厄介事に巻き込まれるのは必須だろう。

別に俺が危ない目に遭うのは構わない、だが、もう1人の少女は別だ。

「（留美奈を危ない目に遭わすわけにはいかない）」

町長宅の裏側に向かいながら、俺はその1つだけに重点を置いていた。

虚勢を張ってまで救うと誓った少女、その少女だけは危険な目に遭わせない。



空は完全に漆黒に包まれていた。  
こちらの世界でも星は見えるらしい、多分、元の世界とは別物だろうが。

町長宅裏の家に入る。

中では、留美奈が暇そうに椅子に座りながら天井を見ていた。

「ただいま」

「ん、おかえりなさい」

「何かしてたのか？」

「天井見てた」

欠伸をして、天井を見続ける留美奈。

「……楽しいのか？」

「わからない」

無表情、真顔というのが正しいのか、留美奈はずっと天井を眺めていた。

染みの数でも数えているのか、ただ単にやることがないから見ているのか、俺には理解できない。

「腹減ったし、何か食うか」

台所に向かい、適当に冷蔵庫を探る、と言っても食材があるわけではない。

元々使われていない家みただし、冷蔵庫に入れてあるはずもないか。

「（仕方ねーな、町長に催促するか）」

そう思い、扉に向かおうとした時のことだった。

「待つて」

少女が俺のことを止めた。

振り向き、留美奈の方を見た。

「何してるんだ、お前……？」

留美奈のかざした右手、その手の平からは見たことのある光が放出されていた。

あれは 俺の肉体強化の時と、完全に同じ現象だ。

そして、その光の中から、1つの“もの”が作り上げられた。

「そいつは」

「これ、食べよ」

デイルとラビイの家で出された、魔法食。  
寸分の狂いもない、完全に同じ魔法食だ。

なぜ留美奈にこんな芸当が出来るのか、答えはすぐに出た。

「お前も、神様爺から、力を貰っていたのか……？」

## 1 1 1 能力

留美奈が使用した力が、俺の眼に焼きついた。

彼女は、完全に同じ魔法食をその力で再現した。俺には分かる、強化した視覚から見ると、それ等の魔法食は寸分の狂いも無い、俺たちが食したものと完全に同じものだ。

「おじいさんに、この力をもらった」

「どういう力だ、そいつは」

「よくわからないけど、ぶっしつせーせーとか言ってた」

「（“物質生成”だろうな、恐らく）」

力の名前から察するに、物質を作り上げる。という能力なのだろう。

「でも、いちど見たものじゃないと作れないって言われた」

「だから、今日見た魔法食を再現できたのか」

納得の行った説明を貰うことが出来た。

神様爺に呼ばれて来たならば、確かに俺と同様、能力を貰うことが出来たはずだ。

そこに、何の違和感もない“はず”。

「（だが、何かが引つ掛かる……）」

神様爺が俺たち、元の世界からこの世界に連れて来られた人間に能力を与えるという話は疑いようもない、だが、俺は何かを見落としている気がした。

「ねえ」

「……ん？ どうした、留美奈」

「これ、冷たくなるよ」

「あ、ああ、そうだな、冷める前に食っちゃおうか」

留美奈に急かされ、考えることを一旦止めた俺は食卓に座る。  
逆に、留美奈は俺と反対側に座った。

「ん？ 俺の隣に座らないでいいのか」

「……？」

「いや、食事をこぼした時の掃除が大変」

「わたし、そんな子どもじゃない」

「（ついさっきまで、こぼしてたじゃないか！）」

頭の中で一人、虚しいツツコミをするものの留美奈は無視して食事を始めた。

がつつくように食っているせいか、やはりポロポロと食べ物から零れている。

「（言わんこつちやない）」

呆れながらも、俺も食事に手をつけ始めた。後で掃除しよう、そう誓いながら。

食事を終えた後、食卓のまわりを掃除していた。  
子どもが出来た時の親の気持ちがよく分かる。

「さてと」

掃除の後、俺は本日、学びとった全ての出来事を頭の中で纏めていた。

留美奈の話から出て来た違和感を思案する。

「（果たして、この異世界に俺と留美奈のような能力を持った人間はどれ程いるのか）」

俺と留美奈がこの世界に連れて来られた理由は単純明快、気に入られたからだ。

俺の予想では、神様爺の奴は気に入った人間を片っ端からこの世界に送り込んでいる。そして、俺と留美奈同様に能力を分け与えているはず。

「（すると、俺たちのように能力を持っている人間がいるはずだな）」

そして、俺は1人だけ、留美奈以外にこの世界以外から来た人間に心当たりがある。

「（キリスト。多分だが、奴も俺たちと同じ世界から来た人間だ）」

キリストというのは、こちらの世界では神の子という定義がある。これほどに有名な人間、元の世界ならば知らぬ人間はいないだろう。

「（まあ、ただ単に、そういう名前の人間がいることも否定はできないが……）」

結果的に、キリストがどちら側の人間かを確かめる術はない。ただ、不可解な情報がある。キリストが殺人鬼、という話だ。

「（もしも、これが本当なら、同じ世界の人間とて関わりは避けた  
い）」

だが、俺が見るからには、礼儀の正しい好青年だ。殺人をする人  
間とは思えない。

「（……分かんない、まだまだ情報が少なすぎる）」

とりあえずは、明日行われる用心棒試験とやらで用心棒としての  
資格を勝ち取るところから始めねばなるまい。としたら、明日のた  
め、早めに寝ることにしよう。

「留美奈、電気消すぞ」

「うん」

カチツ、という音を立ててスイッチを押し、電気を消した。  
布団は1つしかない。

つまり、2人で1つの布団を分け合うことになる。

「せまいか？」

「だいじょうぶ」

「そうか」

声をかけ、留美奈の睡眠を確認すると、俺も寝入ることにした。

## 1 12 試験開始

早朝、起き上がると同時に隣の少女を確認する。

「すう……すう……」

留美奈は小さい寝息をたて、隣で寝ていた。

俺は少女の寝顔を見て安堵すると、立ち上がって窓を開けに向かった。

音をたてて開いた窓から、風が部屋の中に流れ込んで来る。それが、寝起き直後の俺を包み込むように、爽やかな朝を演出する。

「……っし！」

頬を叩いて、やる気を出す。

少女を起こさぬよう、玄関の扉を開ける。

試験の開始時間まで、まだあるというのに、広場に既に人が集まり始めていた。老若男女、年齢を問わず町長宅の前まで集まり始めていた。

何人かの用心棒候補らしき者たちも、町長宅の目の前で、渡された紙のようなものとにらめっこをしている状態だ。

「（俺も紙みたいなもんを貰いに行くかね）」

そう思いながら、町長宅の裏から表に歩いて行く。

玄関の正面に、町長が立っていた。

「ああ、昨日の方ですか。参加しに来られたんですね？ お名前を

よろしいでしょうか」

「新垣月夜。性はアラガキ、名はゲツヤだ」

「分かりました。それではこれを受け取って下さい」

そう言つて渡されたのは、他の参加者らしき者たちも持っている紙だ。

試験の基本事項が書かれている。

- ・試験最中に止むを得ない事態があつても、責任は自分で取ること
- ・試験合格者は金貨1枚、銀貨5枚、銅貨10枚を前金として受領できる。

- ・試合方式はトーナメント形式、決勝まで勝ち上がったとして最高三人と戦う。

という要点が刻まれた紙だ、特に疑問点はない。

トーナメント形式で四人を相手にする、ということはシードを含めないと仮定して、一回戦と二回戦と準決勝と決勝戦の四つのステップを踏むことになる。

計算すると、参加人数は十六人ということだろうか。

「（意外と多いな）」

予想していた数よりも多いことに、若干驚いた。

「ゲツヤ様のエントリーは最後になります故、試合開始時間は今から二時間後となります」

「了解した」



町長と言葉を交わし、その場を後にする。

今回の俺の場合、勝つか負けるかより、問題はどれだけ自分の力を抑えられるかが要点となる。必要以上の力を出さないように、調整する必要があるだろう。

手を握ったり開いたり、グーパーして力の加減を調整する。

「……まあ、最初の相手次第だな……」

加減は出来ている。後は相手の力量によって力の誤差を修正するでしょう。

時間が経つのは、あっという間で、俺は留美奈を家の中から連れ出すと、観客席の試合場に近い場所に席を見つけて座らせた。

これは、試合中に家に強盗が入ったり、観客席の後方で気付かぬ内に留美奈が連れ去られたりするという事態を避けるためだ。

「ちゃんと待ってるよ。適当に終わらせて来るから」

「うん」

念を押して留美奈の行動を抑えつけとく。

これで問題はないだろう、俺は観客が描く円の中央にある試合場に歩を進めた、対戦相手であろう、農夫の姿をした図体のかい男が、既に待機している。

農夫の目の前に立つと、ニヤリと笑われる。

「お前が相手か。こいつは、一回戦は不戦勝みたいなもんだな」

薄気味悪いその顔を俺に近付けるように、見定めて来る。残念な

がら、己と俺の差にある絶対的な力量の超えられない壁を見抜けていないらしい。

「ま、お手柔らかに頼むぜ、小僧」

試合場の中心で、握手を求めて来る。

正直なところ、あまり触りたくないが、ここで触らねばこいつの機嫌を損ねて面倒なことになるだろうし、手を握る。

「よろしく」

言葉を返し、握手を終えた俺たちが一定の距離を取り離れる。

“それでは！ 第一回戦、最終試合。ゴメスVSゲツヤを開始します！”

町長が張り切って声をあげた、あんな声を出せるのかよ。

“始め！”

観客席に多少の騒ぎが起きる、たいした人数もないが、街人ならではの熱気という奴だろうか、それがこちらまで伝わって来る。

「悪いな、小僧！ まずは一回戦、勝ちあがらせて貰うぜ！」

図体のでかい農夫が、その太い肩を向けて突進して来る。所謂、シオルダータックルという奴だ。避けるにしても難しいし、ぶつ飛ばすにしても難しい。と、普通の人なら考えるだろう。だが、生憎と俺の悩みは別なところにある。

「（ぶっ飛ばしたら変だよ……）」

どうやって手加減して勝つか、そこが問題だった。  
とりあえず、両手で受け止めるフリを試みるか。

「ずおおおおおおおー!!」

張り裂けるような大声を出しながら、突進する農夫の肩を、受け止め、

「せいっ!」

「ぐ、おおおおおっ!?!」

結論から語ろう、農夫は両手で受け止めたはずの俺の反動に耐え切れず、そのまま綺麗な放物線を描いて、これでもかというほどに吹っ飛んだ。

一瞬で観客の熱気は冷め、静かになる。

「（……やっちゃった）」

“い、一回戦最終試合！ 勝者、ゲツヤああアアア!”

町長が虚しい勝利の判定を下すが、やはり観客は静かだ。

その後、試合は二回戦へと進み続けられたが、吹っ飛んだ農夫を助けるため向かった俺は、農夫が誰かさんの家の壁を貫いて気絶してる場所で、一言、言っただけ。

「ご愁傷様」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3442z/>

---

虚勢頼りの最強青年

2011年12月28日20時53分発行